

平成 28 年度第 6 回（通算第 84 回）

山口国際文化化学研究会へのおさそい

教員世話人 川口喜治

院生世話人 岡村理恵 小川大貴 陳 鶴丹

荒木麻耶 ビジネス・イル・エライ

- 日時 平成 28 年 11 月 30 日（水曜日）16 時 10 分より
- 場所 国際文化学部棟 C12 教室
- 主催 山口県立大学大学院国際文化化学研究科
- 発表者 国際文化化学研究科 教授 川口喜治

現代典故論

要旨

本発表は中国古典文学研究者という絶滅危惧種によって行なわれるものである。諸賢におかれては、是非ホット・スポットを体験して頂きたい。

さて発表題目にある「典故」とは、「対句」と並ぶ中国古典文学における代表的な修辞技法である。それは、作品に、昔の書物に見える言葉や故事を引用することによって、作品世界を豊饒にする機能を有する。

当然、この技法は、そこに典故が使用されているという理解が作品の作り手と読み手に共有されていなければ成立しない。作り手・読み手が同じ知識・教養を持つことを大前提とする。

畢竟、この技法は、中国の伝統的知識人という、古典中国語（書面語）の運用を特権的・排他的に所有していた階層の人々の世界でのみ有効であったプロトコルなのであった。

したがって、中国古典文学作品が、質量共に高い知識・教養を所有していたトポスから、そのプロトコルの締約外の私たち現代の読み手に開放・解放された時、私たちは作品の解読にあたって、まず典故の解明に多くの時間を費やすことを余儀なくされる。しかし知識・教養の質量の圧倒的格差と文献伝播との限界により、ポリフォニックに典故が嵌め込まれた作品群は冷淡な牆壁・障壁と聳え、読む者を嘲笑し続けているというのが、少なくとも私にとっての現状である。愚痴をこぼしても仕方あるまい。

今回の発表の前半では、典故の技法の実際とその解明の労苦の過程の一例を紹介する。

一方、典故という中国伝統の智慧を過去の時空に凍結しておくのは、もったいない。嘲笑には嘲笑ではなく、現代の私たちならではの叡智を以て返礼しなければならない。

私にその叡智があるというのでは全くないが、発表の後半は、いくつかの先人たちの提案による現代的な方法論をそれぞれ引用し、具体的には記号論、神話作用、インターテクスチュアリティなどの視座から、典故的世界を逍遙し、典故論の可能性を探る。

そして、あわよくば中国古典文学研究の課題の発見、さらには、現代の文化に対する考察のヒントを導き出すことができればよいと考えている。とりわけ後者は、古典が現代に対して有する一等重要価値であるのだ。古典の研究者にとって、古典の現代性を少しでも表現できなければ、それは玩物喪志に過ぎない。とは言いながらも実は結論らしい結論を提出できない戸惑いに居る発表者ではある。ただいつかいつから、研究の口頭発表が完成された論説の披瀝の場となり、討論性を減殺していったのだろうか。